

1973（昭和48）年7月、ポーターをもらった翌日、ぼくは松下電器を退職しました。プロの漫画家をめざして、ストーリー漫画を描き始めたのです。

似顔絵や一コマ漫画は描いていましたが、ストーリーのある漫画は初めてだったので、まずは物語の作り方から学ばねばなりません。

そのためによくは、とにかく映画を観ることにしました。DVDはもちろん、ビデオもない時代でしたから、映画館へ行って観るしかありません。今はすっかり減ってしまいましたが、2本立て、3本立てをやっている「名画座」と呼ばれる映画館に通いつめました。映画館をハシゴして、多い日は一日に8本観たこともありました。半年間で200本は観たと思います。

ペンとノートを握りしめて必死になつて鑑賞し、参考になるシーンがあればロビーまで小走りで行つて、サッとメモして座席に戻る。

起承転結のつけ方、伏線の張り方と回収の仕方、構図の取り方など、映画から学ぶことはたくさんありました。

捨てる練習

文 弘兼憲史

text by Kenshi Hirokane

幼い頃から父親に連れられて映画館へ通っていたぼくは、根っからの映画好きです。それでも、脳の動きが違うのでしょうか、楽しむのではなく学ぶために映画をたくさん観ると、それなりに疲れます。しかも、必死になつて観た後に、部屋へ戻つて漫画を描き始める。当時の睡眠時間は3時間あればいいほうでした。

それでも、漫画家になる――と決めて会社を辞めたぼくには、まったく苦になりませんでした。むしろ、そんな生活を楽しんでいたのです。

今思えば、たった一つの「ぶれない芯」＝「自分に負けない」を心がけるようになったのは、あの頃からだったのでしよう。

「自分に負けない」というのは、今の自分を乗り越えるということ。一歩でもいい、1ミリでもいいから、今いる場所より前に進むということです。

それは、とてもシンプルですが、容易なことではありません。

自分を超えるためには、まずは自分を知らなくてはいけない。それが意外と難しいのです。

Profile

1947年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業。松下電器産業（現パナソニック）に勤務後、74年に『風薫る』で漫画家デビュー。『島耕作』シリーズや『ハロー張りネズミ』『加治隆介の議』など数々の話題作を世に出す。『人間交差点』で小学館漫画賞（84年）、『課長島耕作』で講談社漫画賞（91年）、講談社漫画賞特別賞（2019年）、『黄昏流星群』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞（00年）、日本漫画家協会賞大賞（03年）を受賞。07年には紫綬褒章を受章。人生や生き方に関するエッセイも多く手がけ、『弘兼流 60歳からの手ぶら人生』（海竜社）、『弘兼流やめる！生き方』（青春新書インテリジェンス）などの著書がある。



捨てる練習
プレジデント社
708円(税込)